

われわれの教室におけるこうした行為は、二重の意味で許されないことである。というのは、教室における規律の欠如の他に、幼少の時から家族と学校は、社会の規範の尊重を子供たちに教え込まないといけないからである。

最も感じられることは、キューバ人の真摯さ、良いマナーが現実にも、イメージにおいても低下していることである。低俗さをモダンなことと一緒にすること、下品さ、恥知らずを進歩と一緒にすることは受け入れられるものではない。社会で生活することは、第一に他人の権利の尊重であり、上品さが優先するという基準を認識することである。

以上、ラウル議長が列挙した事例の多くは、必ずしもキューバだけに見られるものではなく、他のラテンアメリカ諸国でも一般に見られるものですが、キューバ経済が、一応の安定を保ち、市民が取得する賃金のみで一定の生活を楽しめた 80 年代までのキューバではあまり見られなかったものです。

80 年代のキューバでは、普通、家族は 3,000~4,000 ペソ貯蓄がありました。それぞれが、職場を定時に終わり、友人や家族と談笑したり、映画や音楽会に行ったり、ゆっくりと生活を楽しみました。バケーションは年間 1 カ月とって、海水浴場に行き、リフレッシュしました。ないものは融通し合い、助け合い、市民の間に連帯感がありました。「黄金の時代」と言われるゆえんです。

しかし、ソ連・東欧の経済が急激に悪化し、これらの国々からの資材の輸入が激減し始めたキューバでは、1990 年 8 月「平和時の非常時」が宣言されました。各種の生産が低下し、食糧生産が減少するとともに、インフレが急上昇し、20 年間で実質賃金は、かつての 5 分の 1 に低下しました。つまり、普通の賃金だけでは、生活できなくなったのです。

あるものは、海外からの家族送金に頼り、あるものは観光関係の職業で得られるチップでカバーし、あるものは、外国企業に勤めて正規以外の賃金を取得し、あるものは、特技を生かして家庭教師や修繕サービスで副収入を得たり、あるものは、勤め先でモノを横流しする、レジで売り上げをごまかす、賄賂を得たり、便宜を供与してもらったりして対処しています。横流ししたり、国のものを盗んで手に入れたりすることを、「解決する」という言い方で表現するようになりました。



街頭での露天商

一方、政府は、こうした社会現象を見て、1993 年から自営業を大幅に認める政策を打ち出

し、現在、自営業者は、20年で20倍増加して42万人に達し、経済活動人口510万人の10%近くになろうとしています。実際、ハバナ市では、各地にパラダール（民間のレストラン）、露天商、各種修理店が目につくようになりました。

外国人観光客は、1990年の30万人から10倍の300万に達し、観光客向けのいろいろな商売が目につきます。観光客のもっている日用品をキューバ人も見て、羨望心がかきたてられます。



自営農は、この5年間で5万人から22万人に増え、未利用地の使用権を取得した新たな農民の中にニューリッチ層が生まれつつあります。

### 300万人に増えた観光客

こうして、キューバは、残念ながら、それぞれが、カネ、カネ、カネとより多くの収入を追い求める時代になってしまいました。思いやり、連帯が忘れられ、何よりも自分と家族の問題を解決することが最優先の社会となりました。こうした失われた、思いやり、助け合い、連帯心は、回復するためには、何よりも賃金の購買力が回復され、賃金のみで一定の生活ができるようにしなければなりません。これらの公務員は、380万人で、勤労者の75%になります。しかし、この過程は複雑で、長い時間が必要です。

ラウル議長は、「私の発言を聞いたすべての人々に、この発言を冷静に読み、一人ひとりが深く考えるようお願いしたい。社会的な規律の欠如と対決することは、単なるキャンペーンとなってはならず、恒常的な運動としなければならない」と述べて、継続的に取り組むとしています。

(2013年8月29日 新藤通弘)